

を持つたらしい。和田氏も爲めに私の脚本を幾度も讀まれたといふことを語られた、どうも背景の誂へが簡單過ぎるよ」と云はれた。全くの所、あの「歌舞伎物語」の背景は、私の創意よりは、むしろ和田氏の創意になつた所が多かつた。なんでもない垣にまで、下邊には南天を描いた、たゞの垣では今までの大道具と同じになつてしまふといふ恐れからだ。

今までにないことを、許す限りは芝居へ入れやうとした先生たちの努力は、こんな所にまで及んだのだ。第三幕の清水舞臺の道具は、芝居開闢以來と誇稱された、内部から外面を見せる、清水の舞臺を三角に切つた斜めに取つた柱から柱への間隔、釣下がつた燈籠は寂しい色を見せて、外の美はしい櫻の花盛りと、東洋流の對照をしてゐる。

劇評家の杉氏は口を極めて稱されて、今までに見たこともないと云はれた。その舞臺の背景と共に役者の技藝も非常に賞賛を受けた。

これから私の作は度々上場されたが、あまり記憶に止まるほどのものがない。私もまた「歌舞伎物語」の贅澤に馴れて、尋常のものでは飽足らぬ心地がしてゐた。

この飽滿に輪をかけたのは、同じく明治座の「破戒會我」であつたが稿が長くなるから、そのことは次回でお話をしませう。

本日午前七時、倫敦ローヤルアルバート、ドック出帆。午後八時英國を水平線上看見捨て、夕陽の美を寫生してキャビンに入り、この端書を認む。日本着は七月十五日前に御座候。

後略

五月二十五日

安藝丸にて 丸 山 晩 霞